

武者ぶるい論

坂口安吾

青空文庫

妖雲よううん 天地にたちこめ、円盤空をとび、巷ちまたの天文家は戦争近しと睨にらんだ形跡であるが、こと私自身に關しては、戦争になつても余り困らない人間だ。どうなろうと運命だから仕方がないという考えは私の持病なのだから。もつとも、運命とみて仕方がねえやと言うだけで、火の子だの地震だの戦争に追いまくられるのが好きな性分ではない。

強いて鬭争を好まず、ただ運命に對処する、という心掛けは、平穩温和の精萃せいすい、拔群の平和主義者というべきかも知れない。だから私のような人間はバカげた思想を好む。

黄河こうがという河はふだんは水がないが、大雨がくると黄土の泥でいりゆう流ながあふれたつて一年に何メートルも河底に泥が堆積たいせきする。あげくに河床が平地よりも高くなつて二、三十年目には必ず大洪水を起すという因果な河だ。この川が洪水を起すと、昨日まで利根川とねがわを流れていた筈はずの黄河が、今日は天龍川上流辺からドツとあふれて名古屋の海へ流れこみ、その中間の何百方里が湖水になるという大變動をやらかす。五千年前から黄河治水を専門の学者政治家が散々さんざん 智慧をしばつても、今日に至るまで、全然五千年間定期洪水の起るがままである。

そこで今から二千年ほども昔に、水と地を争うべからず、という名論をだした黄河学者

がいたのである。つまり洪水と張り合つて生きるのはムリだというのだ。防ぎようがないのだから、勝手に洪水を起させておくに限る。その代り、洪水地帯の住民をそっくり洪水のない地方へ移住させてしまえば、洪水がなくなつたと同じことだ。こういう名論である。もうちよつとデカダンの学者は、黄河の洪水を天命と見て、だいたい支那というところは百姓どもが人間を生みすぎて困る国だ。洪水のたびに五十万ぐらいずつ死んでしまうのは人口調節の天命であるから、天命に逆らわん方がよろしい、という説を唱えた。唱えた当人は太平楽かも知れないが、天命によつて調節される五十万人の一人に選ばれるこつちの方は助からないから、同じ運命論でも、水と地を争わず、洪水は洪水の勝手にまかせ、人間はさつさと逃げてよそへ住みつけという穏やかな方が好ましい。しかし聖賢はこれを巧言令色うげんれいしよくというね。逃げた土地の先住民は大迷惑であるし、洪水にまかせる大沃野だいくやは実利の大損だ。学者は利巧そうな勝手なことを言うが、住民は洪水を承知で実利の方へ戻つてくるに極きまつているものだ。

こういう怪物の対策には中間がない。運命にまかせるか、完全にねじふせるか、である。完全にねじふせるのは大変だ。万里ばんりの長城の比ではない。近代科学の精萃とマジノラインの何千万倍ぐらいのコンクリートを使用しなければならぬだろう。それだけの大資本や

科学陣がともなわぬうちは、運命にまかせるよりほかに仕方がないのである。中途半端なアシライよりは逃げるに如かずということが五千年の悪戦苦闘でハッキリしているのだから。

私は戦争というと黄河を思いだして仕様がな。同じぐらいの怪物だ。そして、黄河学者の名論や遺訓が大そうふさわしく役に立つ。水と地を争わず。これを戦争の場合は水を火の字に置きかえればよい。この火を防ぐのはムリであるから、さっさと逃げる。さもなければ、手をあげる。抵抗したってムダである。

人口調節の天命とみるデカダン派は將軍の思想で、東条流。人口調節は戦争よりもコンドームの方が穩当だ。けれども避妊薬ひにんやくを国禁しても、戦争を国禁したがない政治家や軍人が多いから、庶民どもは助からない。東条流という奴は、將軍自体にとっては太平樂なものだ。自分自身だけは人口調節の天命によって指定された一員に数えていないのだから。MPが迎えに来て逃れぬ運命が分るまでは、人口調節に服さないツモリなのである。人口調節に服す身の切なさが分つていれば、戦争なぞやれないはずだ。これを聖賢の言葉では、自分の欲しないものを人に施すな、と言うのである。

しかし兵隊になりたがる奴がいるからいいじゃないか、というのは、水と地を争わずの

逆なのである。実利があれば洪水を承知でも住みつく。食えない人間は兵隊になる。洪水が好きだというのはウナギかナマズで、人間ではなからう。人殺しが好きだったり、威張るのが好きだったり、それで兵隊になった、という特別な人種は本来聖賢の言葉に無縁のケダモノなのだから、ジャングルへ移住して勝手なことをやってくれると助かるのだが、そうはいかないところに、火と地を争うべからず、つまり戦争になったら、手をあげたり、逃げたり、決してムリに逆らわないことにしましょう、という思想の卓抜な所以が分るのである。

もつとも、運命主義者というものは運命に逆らわぬだけが能ではない。逆らってもムダという理を会得するに至って逆わないのであるから、逆らえばもつと巧くいくという理が算定できれば逆うのである。狂犬に出会ったら逆らわず、噛まれなければならぬという定式が、あるわけではないのである。大資本と現代科学の萃を集めれば黄河をねじふせることはできるかも知れないが、貧乏ではとてもやれない。それで逆らわないだけである。

戦争も同じことだ。戦争などというものは無い方がいいにきまっているが、さしあたって無くする方策は見当らないし、まして日本のように自分の主張が何一つ通らぬ国の人間のことだから、大それたことを企むイワレは一つもない。ただもう運命にこれ従い、ただ

ちに手をあげ、ただちに逃げれば足りる。

戦争という一向に実利のない仕事にどうして多くの国々が精を入れるのだから、私は頭が悪いから、どうにも理解がつかなくて仕様がなない。軍備などという反生産的な物をそっくり生産面にふりむけ、トーチカや軍艦をつくる代りにアパートだの病院でも造った方が、悪い筈はなからうと思うが、そうでもないのかな。

然し、戦争来れ、と待ちこがれている日本人が、老若男女シコタマいるのには驚くのである。私の言うのは軍国主義者、右翼浪人のことではなくて、百姓だの小学校の先生だの坊主だの女給だのパンパンだの商人だの、つまりあまねく庶民に於てのことなのである。

しかし、彼らの論理は無邪気である。この前の戦争で狡い奴らに先を越されて損をしたが、今度はチャンと要領を覚えたから、今度戦争になってみる、買い溜め、売り惜しみ、闇屋、持ち逃げタダ拾い（戦争中は泥棒なんて言葉はないや。持ち走り、先き拾い。所有権なんて在りやしねえぞ。それをチャンと心得たんだ）モウケ放題にモウケてやるから覚てやがれ。こういって、坊主も、先生も、女給も、妾も腕を撫しているのである。

百姓とくると、もつと猛烈である。都会の商人も会社員も職工も家をやかれ着のみ着の

まま命からがらの戦火に煽^{あお}られた敗残者であるが、百姓は高見の見物だもの。燈火管制とは何だ？ ナニ、飛行機がくる？ くるが、どうした。オレの頭の上もいっぺん飛んだが、なんでもねえや。なんでもないに極つてらア。案山子^{かかし}の同族野郎め。

戦争がくると、ふだん威張つてやがる都会の野郎が泣きついてきて、ペコペコ、着物を身ぐるみぬいで、段々ウス汚い女中みたいな女ばかりになりやがって、こつちじゃア自然に着物がふえるんだナ。モーニングまで貯^{たま}りやがったよ。シルクハットだけ、なかつたなア。背広だのネクタイだの腐るほど集^{あつま}りやがるもんで、ワイシャツの着方てえものを覚えなきやアならねえな。戦争は文明なものだ。銀座なんてえものは戦争がくると奥州蛇谷村字安達ヶ原へ集るね。戦争が済んで二、三年も、まだ文明だね。戦争ぐらい文明平和なものねえな。戦争が済んでから四年目ぐらいにダンダン世の中が悪くなるらしい。都会の奴がゼイタクを覚えるとロクなことは有りやしねえ。どうも世直^{はしま}しに戦争が始^{はじ}まると、もう日本はダメになるぜ。今度の戦争が始つてみやがれ。ポリ放題にポツてやるから。ギヤバジンの三^みツ揃^{ぞろ}いぐらいじゃア、めつたなことで米の一升も売つてやらねえから覚えてやがれ。

虎視^{こし}タンタン、戦争をはるかに望んで武者ぶるいしている老若男女が数知れないのであ

る。しかし、やっぱりダメだろうね。戦争の要領を覚えたツモリでも、新手を打つのを天才といつて、なまびようほう生兵法はおおけが大怪我の元という通りだ。習い覚えた要領も、次の戦争のドサクサには役に立ちそうもないらしいや。

私がこういっていきめると、彼や彼女はフンと笑って、コイツ戦争に自信がないな、次代の斜陽族か、とお考えになるのである。

人生に夢は大切だ。然し、戦争の味を覚えた、という虎視タンタンの武者ぶるいは、夢というには、あまりに悲しい。今や日本に底流をなして重くうごめいている潮の流れは、これを野武士の夢、野武士の精神というのである。

空にB3が、どこかに原子バクダンがバクハツしていても、生きている人間は野武士にすぎないのだ。何百年、否、いな千年前の群盗にすぎないのである。それが千九百六十年になっても二千年になっても、常に戦争というものの姿だ。原始のままなること黄河にあふ溢れる泥の流れの如くごと素朴な原人の姿にすぎないのである。

戦争の正体とは、かくの如きものだ。今度戦争になろうが、その又次に戦争になろうが、庶民の生活は破れて、人口調節に服して死ぬか、野武士になるか、その本態に变りのある筈はない。戦争にかわ変りぼ栄えがあつたら、お目にかかりたいものだが、しかし拙者は変り栄

えがないと会得しているから、戦争来たれなどと武者ぶるいはしない。しかし戦火と地を争う愚はしないだけのことだ。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「月刊読売 号外版」

1951（昭和26）年2月

初出：「月刊読売 号外版」

1951（昭和26）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

武者ぶるい論

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>